HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	まえがき(<特集>共同研究報告 ： 『国際化=異文化理解に関する方法論的研究 ： 文化障壁を緩和するための効果的施策確立に関する考察』)
著者	奥田，崇之
引用	北海学園大学人文論集，4：51-56
発行日	1995-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

【研究報告特集】

国際化＝異文化理解に関する方法論的研究
── 文化障壁を緩和するための効果的施策確立に関する考察 ──

◇はじめに

我が国の国際社会との交流は近年，地球時代の相互依存関係の深まりを反映して増大する一方である。しかも，国際交流は今日，国家(政府)，地方自治体レベルから民間の企業，個人レベルまであらゆるレベルで広範に行われ，いわゆる「国際化」が全国的に進行している。その波は勿論北海道にも及んでおり，特に旧ソ連を含む北方圏との結びつきが強まっている。

国際交流の拡大にともなって，経済大国化した我が国へ海外からの大量のモノや，情報化時代が産み出す膨大な情報の流入が加速するとともに，ヒトの入国が飛躍的に増大している。こうして各分野にわたる急激な交流の増加は，異質な文化の接触に伴う摩擦や軋轢をもたらし，いわゆる文化摩擦を副産物として生むことにもなる。特に外国人との日常的な接触が頻繁になると，ヒトとヒトの「異文化接触」がトラブルや衝突を生みやすくなる。円滑な交流を阻止するこうした文化摩擦の軽減，解消を目指して，近年にわかに「異文化の理解」が叫ばれるようになってきたのである。

異文化問題が意識されるようになってきたのはこの十年位のことであり，特に1990年代に入って外国人入国者の数が300万人を越え，海外に出掛ける日本人の数が1,000万人を越えるようになってからのことであろう。それとともに，バブル経済時代には特に3K嫌いの日本人に代わって大量の外国人労働者（その多くはアジア地域から）が来日し，都会地やその周辺に住むようになったことが，異文化との接触が歴史的に少なかった日本人にとって重大な問題になり，全く新しい異文化への理解と対応を求められることになってきたのである。それは，言葉の問題からさらに生活習慣など文化の様々な側面を含むものとなった。まさに異文化そのものとの対話とコミュニケーションの必要が生じてきたのである。

また，経済交流の甚だしい増大は，貿易によるモノの流入だけでなく，日本において経済活動を行うヒトとその活動の場，つまり，会社や事務所，さらに工場のようなモノとそれを動かすソフト，つまり，経営や管理などが外国の資本やヒトによって国内に持ち込まれることになった。そしてそれは日本自身の経済活動のグローバル化に対応する形でますます増大し，ボーダレス経済の大きな地球的な枠組みの中で動くことになったのである。多国籍企業の日本における展開は，そこで働く日本人社員達に異文化の中での生活を求め，言葉をはじめ，異文化の理解を必須のものとすることになっている。ここにも，いままで日本人が経験しなかった新しい異文化への理解と対応の問題が起きているわけである。

確かに国際化に対する社会的対応として異文化理解への施策を体系的，制度的に進める必要が生まれてきているということができよう。もっとも文化にはさまざまな要素や側面があり，それを理解する方法として何か特定の方程式のようなものを包括的に定式化したり，マニュアルを作ったりすることは，言語や芸能，習慣のようなものを除いては無理と言うしかないだろう。異文化接触の個々の局面における個別的アプローチが求められよう。この共同研究は，その最初の手掛かりを求めるための実情調査研究として，国内における異文化の交流や異文化理解の実情を多面的に調査研究することを目指し，個々の研究者の専門分野に近いさまざまな場における問題を取り上げて，自由に考察するという方法をとった。

◇研究報告内容

近年我が国には外国から多数の留学生，観光客や労働者，あるいは，ビジネスマン，学者，研究者，などの人達が来日し，そのかなりの人達は定住者として日常的に住み，社会生活を営んでいる。このようなきわめて日常的な人的国際化が国内で進行している現状の中で外国人を対象とした日本語・文化教育が，近年，中央の指導もあって各地方自治体レベルでの国際化施策の重要な柱の一つとして推進されており，留学生支援や在住外国

人へのサービス活動などとともに一層の展開が求められる状況にある。こうした地域レベルの国際交流活動の実態を首都圏，関西圏，九州，北海道にわたって探るとともに，外国人に対する日本語教育を軸に地域レベルの国際化施策への取り組みの現状と問題点を洗い出し，これを北海道における国際化施策への課題と対策に結び付けて考察したのが「日本語教育から見た北海道の国際化」（中川かず子／奥田崇之）である。

異文化との接触でまず最初に障壁となるのは〈ことば〉である。言葉はそれ自体文化であり，しかも，異文化と交流し，その文化を理解するためのもっとも重要な手段と言ってよい。言語が及ぼす影響は極めて大きな文化的衝撃力を持っている。異文化としての言語を理解する一つの重要な道は翻訳である。翻訳による外国言語という異文化の理解にどの様な問題があるだろうか。北海道縁の，もっとも有名な外国語とその翻訳〝Boys, be ambitious!〟（「少年よ，大志を抱け」）――ウィリアム・S・クラークのこの有名な文句の「ambitious（⇦ ambition）」がどうして「大志」という日本語に移し変えられることになったか。この短い，しかし，非常に人口に膾炙し，世の多くの青少年を奮い立たせた言葉がどうして生まれたか，その本来の語義，語法の歴史的検証と日本語への移植の経緯を辿った異色の調査研究が「ambition と大志」（高久真一）によって行われている。

異文化理解には，前述のごとくさまざまな問題，側面があるが，「異文化と人類学・博物館」（須田一弘）は異文化の展示（民俗学博物館など）を通して異文化をどう捉え，理解するか，また，これに伴う問題がどこにあるか，を，博物館の異文化提示の変遷と国内の具体的な例をみながら考察し，その意味と思想を文化人類学の視点から問い直そうとしている。

近年アジア地域などからの在住外国人就労者の増大が社会的に大きなインパクトを広げているが，「異文化理解と日本の国際化をめぐって――外国人労働者と日本での医療問題」（竹内潔）は外国人労働者の医療問題という側面から外国人への国，地域レベルを包含した日本社会の対応の実情を首都圏の現場で調査，様々な障害や問題を指摘するとともに，外国人との接触に依然として慣れない日本社会の対応のまずさを通して国際化への問

題点を探ったものである。

本共同研究の特異な点の一つは，北海学園大学人文学部が擁する優秀な外国人教員が参加していることである。日本人教員が行った調査研究が国内における異文化との接触，交流の場を前提にしているのに対し，外国人教員は外資系企業における英語力の問題からさらに外国文化との比較研究の分野に踏み込んでいる。首都圏の外資系企業（多国籍企業）を対象に，国際企業内部の実務や人事管理などにおける国際語（英語＝異文化）の役割，英語能力を必要とする仕事の範囲，英語使用の方針，英語社内研修の実情などについて人事担当者，社員へのインタビューによる調査，研究者の共同討議による評価と分析を行い，大学の英語教育との接点を探ったのは「東京圏外資系多国籍企業における英語使用実態調査 ── 予備研究」(ローン・カークワード／ダイアン・ローマス／米坂スザンヌ＝グループ研究）である。

また，比較研究の分野では「北海道のアイヌ，スコットランドのゲール両民族の近代におけるアイデンティティ概念」（イアン・スミス）が，日本の北海道のアイヌとスコットランドのゲール（ケルト）という，いずれも先住少数民族の歴史的比較から，それぞれの民俗が持つ言語，自然との関係などの文化的な諸相の特異性，歴史，観光，記号体系など外部者がステロタイプ的イメージを作り上げる諸要素を通じてアイデンティティを探り，さらに，周囲を取り巻く外部の大文化とのアイデンティティの異同とその関係を問いかけている。

一方，「日米中学生意識調査」（キャロル・ブラウニング）は日米それぞれ3校，500人ずつの中学生を対象に，学業，課外活動，自分，家族，世の中についての意見をアンケート調査で集め，両国中学生の意識や物の考え方の比較を試みたもの。集計が未了で最終的な比較分析が出ていないのは惜しまれる。

締めくくりとして一言付言したい。

当初の研究計画では，国際化の重要な要素である異文化理解の方法論と

いう，魅力的ではあるが，未開拓の，しかも広大な分野を探究するための第一歩にしたい，という趣旨で取り組んだ。従って，まずは異文化との出会いの様々な局面をなるべく幅広く，自由な角度から捉えるべく，各研究者の専門分野に近いところに研究テーマを設定することになった。このため，多彩な調査計画と問題の提起が行われたが，実施の段階になって，本格的な調査をするには，時間，資金その他の制約が大きく，結局，予備的，パイロット的な調査の域に達したところで終結せざるをえないものが少なくなかった。テーマ設定もややバラついた点は否めない。それぞれの調査研究は，時を追って結実してゆくことを期するとともに，機会があれば，これを基礎にしてさらに包括的，統一的なアプローチによって展開を図りたい。

（奥田　崇之）

この共同研究は1993年度北海学園学術研究助成を受けて実施されたものである。

◇共同研究参加者と研究テーマは以下の通り。（研究報告論文掲載順）

中　川　かず子	（日本文化学科）	「日本語教育から見た北海道の国際化」
奥　田　崇　之	（英米文化学科＝研究代表者）	「同上」
高　久　真　一	（英米文化学科）	「Ambition と大志」
須　田　一　弘	（日本文化学科）	「異文化と人類学・博物館」
竹　内　　潔	（英米文化学科）	「異文化理解と日本の国際化をめぐって ── 外国人労働者と日本での医療問題」
ローン・カークワード	（英米文化学科）	「東京圏外資系多国籍企業における英語使用実態調査 ── 予備研究」（英文）
ダイアン・ローマス	（英米文化学科）	「同上」

米坂スザンヌ	(英米文化学科)	「同上」
イアン・スミス	(英米文化学科)	「北海道のアイヌ,スコットランドのゲール両民族の近代におけるアイデンティティ概念」(英文)
キャロル・ブラウニング	(英米文化学科)	「日米中学生意識調査」(英文)